

令和元年5月22日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03220

研究課題名(和文)身体化された「伝統的」モノづくり技術に関する人類学的研究

研究課題名(英文)An anthropological study of "traditional" embodied craft technique

研究代表者

松村 恵里 (Matsumura, Eri)

金沢大学・国際文化資源学研究中心・客員研究員

研究者番号：10711921

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、インドの「伝統的」手描き染色布を対象として、モノづくり技術における言語では表しきれない知識が、訓練や経験の中でどのように習得されるのかについて明らかにし、身体化された「知」とつくり手の認識との関わりについて検討したものである。

モノづくりに関わる知識は、近代的教育にみられる形式知の様に完全な一般化は難しいが、教授者(師)、訓練者(弟子)の関係を通じた訓練の中で伝達が可能となってきた。「伝統的」手描き技術の習得における身体化は、知の受け手の理解を触発し情報を知識に変え、独自の考え方や言葉を有する製作者としての意識を育み、暗黙知を「半暗黙知」として伝達可能としてきたといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「伝統的」なモノづくり技術における身体化された経験知に関する事例研究は、文化人類学の分野でも進められてきた。本研究では、技術を持つ当事者(報告者)の視点から、技術が各段階を経ながら身体化される過程を明らかにし、技術の身体化が人の認識に如何に関わるかという内的な部分にまで迫って分析する。それにより、モノを媒介とした身体と認識の相互作用の問題へと切り込み、西洋的・近代的価値判断を基準とした私/我々自身の価値観の再考を促しながら、身体/認識の問題についての人類的研究における議論を活発にする。さらにそれは、文化資源の持続可能な技術伝承を対象とした分野への実際的な貢献に繋がる可能性を有するといえる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this article is to examine the correlation between embodied knowledge and craft makers' confirmation of how knowledge that is not easily be verbalized can be transmitted and embodied in their training and experience.

This study focuses on the creation of kalamkari, which is a traditional, hand-painted temple cloth in South India. The technique for creating the cloth is difficult to relate to others in any explicit manner. However, it has been possible to transmit the technique through a master-apprentice relationship. The embodiment of this "traditional" technique becomes tacit knowledge for the apprentice, who develops an identity as a maker of handicrafts and might then transmit this "implicit knowledge."

研究分野：文化人類学

キーワード：身体化 暗黙知 認識

1. 研究開始当初の背景

南インドで製作される手描き模様染色布であるカラムカリは絵画的要素が強いが、そのつくり手たちは、近代的視点が介在した美術教育を受けていない。彼らは訓練段階において、師の手元を観察し、手本を模写し、それを習得することで、自由に「描く」力を手に入れられると考えている。本研究では、共有される「伝統的」技術を取り上げ、身体化された実践知としての技術において、どのような認識が生じ、さらに「判断力」を促してゆくのかについて、同種の技術を伝承しながら教授法も製作環境も異なる同州他地域との比較を元に検討を進めた。

「伝統的」手描きカラムカリ製作地であるアーンドラ・プラデーシュ州内のシュリ・カーラハスティ(以下S地区)では、2004年を大きな転換期として政府による経済的支援が行われたことを契機に、非実用的な「見るため」の寺院掛布から「着る」「使う」ため実用的な衣服用布地などに用途が広がった。衣服を中心とした実用布の生産が急速に進み、技術が高く信用がおける工房ほど大都市部からの注文生産が増加し、「伝統的」な高い技術の不可視化が加速した。一方、S地区の動向に反発するように、壁面装飾布としての「伝統的」カラムカリを打ち出しながら、社会的弱者とされる女性たちの支援に繋げているのがK地区である。K地区では2004年の津波被害を発端として、HIV陽性者やアウトカーストの女性たちの生活支援を目的としカラムカリ工房(女性のみ雇用)を2007年に開設した。ここでは、「伝統的」技術を利用して、近代的美術教育を受けた者が指導にあたり、病んだ女性や差別される女性たちの「物語」のデザイン化に踏み切った。訓練というより教育に近く、教授する側から人材育成に積極的に臨むことにより人材開発が可能となり、結果的に一部の製作者の技術が飛躍的に向上する結果になっている。

両地区で共通するのは、背景は異なるが2004年が大きな変化の契機となり、つくられるモノに影響が及んだということである。S地区では技術の合理化と「伝統的」な工程面技術の不可視化が進むと同時に、宗教的・「伝統的」デザインが実用布上にかかるうじて残存することになった。一方のK地区ではS地区を手本としながらも、その変化を敏感に察知し独自の解釈で「真正」なカラムカリを追求するようになった。

成立背景や習得形態が異なる両地において、技術が知識として理解される中で、作る人々の意識、及びつくられるモノに変化が生じることとなった。S地区とK地区それぞれで独自に解釈される「伝統的」カラムカリの「真正」な要素が、異なるスタイルの「手描き」カラムカリ生産へと発展を見せ始めた状況が研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究を通し、近代的美術教育の影響が希薄なインドの「伝統的」手描き模様布製作技術に着目することで、製作現場において共有される「伝統的」モノづくり技術の習得過程の位相について、教える側、覚える側の相互関係から明確化する。さらに、両地区における「訓練」と「教育」両面から製作技術を比較しながら、インドの「伝統的」モノづくり技術における言語化が難しい知識が、訓練や経験の中でどのように体得されるのかについて検討し、身体化された「知」とつくり手の自己認識との関わりについて明らかにすることを目的とする。これらの検討のために、以下の3点に注目して研究を進めた。

(1) 製作現場において共有されている基本的なデザインと「創造的」デザインについて明らかにする。そのため、図像や叙事詩の正確さという基本事項の中で、最も「伝統的」とする基準がどこにあるかを明確にししながら、そこから展開されていった発展型のカラムカリデザイン

について類型化し、デザイン分析を行う。

(2) 訓練における「観察する/見る」「模倣する/真似る(紙面)」「描写する/描く(布面)」という行為の中で、技術がどのように確実に伝わり身体化されてゆくかというプロセスを探り、なにが「正しい」「良い」とされてゆくのか、また、視覚的な巧拙にどのような身体行為が関わっているかなど、技術力が判断される根拠について明確にする。

(3) 身体化される「知」としての「描く」行為が、「どのように作り手の認識に影響するのか」について検討する。さらに、言語化が難しいとされる技術の習得が、つくる人々の意識にどのように影響を及ぼすのかについて明らかにする。

3. 研究の方法

身体化された「知」と作り手の認識との関わりについて明らかにするため、アーンドラ・プラデーシュ州内2地域を中心に、製作現場の実態調査を行い技術の身体化過程についての記録、さらに、継続的な画像分析を行った。また申請当初、フランスでもデザインに関する資料収集を行う予定だったが、資料がインドへ引き上げられたため、調査の必要がなくなった。調査にあたっては既知の製作者や知人を通して、現地に関する知識や人脈を生かした調査が可能となった。

調査日程は以下の通りである。

2016年8月6日 - 2016年9月2日

2017年8月20日 - 2017年9月19日

2017年12月6日 - 2017年12月13日

2018年12月20日 - 2019年1月1日

アーンドラ・プラデーシュ州

(1) S地区およびK地区において、技術の習得過程の詳細を、身体的側面、認識的側面から記録した。S地区では2件の工房を拠点にして、特に参与観察に重点を置きながら調査を行った。両工房共長期にわたり調査を続けてきたため、「伝統的」技術の変化やその習得についての記録は充実している。K地区のHIV陽性者支援施設は歴史も浅く、施設に守られた近代的教育環境の中において地域的技術が伝承された初期段階を記録することになった。

(2) 製作地で作られる布や博物館資料・文献資料を収集し、基本的デザインとその発展型デザインの比較検討のための画像分析を行った。対象とする博物館には、歴史的資料として高い評価を受ける染織品が所蔵されており、中にはそのデザインが当該地域のものとの相似性が非常に高いものもあるため比較調査対象として大変有効であった。

グジャラート州及び、テランガーナ州

(1) グジャラート州では、マーターノチャンダルヴォというマーター神を祭る儀礼に関するデザインが主流の手描き模様染色布が製作されている。データ収集にあたっては、製作者に直接指導を受けて神話デザインの意味や重要性についての聞き取り調査を行い、S地区における製作状況や製作者としての認識についての比較を行った。

(2) グジャラート州のキャリコ博物館、テランガーナ州のサーラル・ジャング博物館(Salar Jung Museum)と州立博物館(State Museum)には、重要なカラムカリが保管されているため、これら博物館における所蔵資料の画像調査を行った。

4. 研究成果

(1) 技術の習得過程と描かれるデザインの分類

インド国内の染織技術を分類すると、カラムカリは「道具への依拠が低い」と共に「修正ができない」タイプの布である。道具よりも重要なことは「描く」技術の習得であり、その技術は工程面の技術とデザイン面の技術に分けることができる。S地域で培われた技術は、基本的に師から弟子へ訓練を施すことで伝承されてきた。その際に、重要視されることは、以下の過程である。

師の描写を「観察する/見る」 師の手本、及び師や先人の作品を「模倣する/真似る（紙面、布面）」 与えられたテーマを自身で「描写する/描く（布面）」

この各過程は連動、且つ循環しており、訓練当初は各行為の意味が分からなくても、分からない成りに次の行為に進むこと繰り返すことで、その意味が理解できるようになる。このような訓練の中で独自に理解を深め、自身の言葉や思いと共に技術を弟子に伝承してゆく。

一方K地区では、フランスのクラフト作家で元美術教師であり、S地区でも技術のある程度習得した工房の経営責任者が工房の女性たちに技術を教えている。また、定期的にS地区出身の製作者を招き滞在させることで、従来の「伝統的」なカラムカリの教授法による訓練も女性たちが経験する。K地区の場合、「伝統的」な教授法はS地区に倣っているが、フランス人経営責任者による教授で重要となる過程は以下の通りである。

デッサン訓練において対象物を「観察する/見る」 デッサン訓練において対象物を「描写する/描く（紙面）」 自身で考えたテーマとデザインを提案することが要求される。

この工房のデザインは、S地区の「土臭い」朴訥とした「伝統的」デザインというより、メッセージ性のある独創的デザインが主流となってきた。このような両地区で製作されるデザインの分類とその関係、「伝統性」としての規範は以下の通りである。

S地区デザイン

○「伝統的」デザイン：

- ・叙事詩形式 ラーマ ヤナ/ マハーバーラタ等（これらを元に神画形式が発展）
- ・神画形式 宗教的神々/ 神話の一場面/ 生命樹/ 日常風景等

○実用布用デザイン：生命樹の元にした鳥・花/ 神々・人物/神話の一場面等

K地区デザイン

○伝統型デザイン：女性たちの日常・思い出・理想/ 宗教的物語等

○実用布デザイン：猫などの愛玩動物/ 生命樹の元にした鳥・花等

「伝統的」規範

・大前提はカラムによる「フリーハンド」であること。/・宗教的モチーフを用いた叙事詩形式、ないし神画形式を基本とする。/・基本の3色（黒（＝描線用） 白、赤、）ないし5色（黒（＝描線用） 白、赤、黄、青）を使用。/・黒は描線には用いるが、地色以外の主要部分のデザイン、特に神に関わる部分には色として使用しない。等

（2）「正しさ」や巧拙の基準

S地区において実用布の生産が増加し、「伝統的」カラムカリ技術が不可視化しても、宗教的要素と彩色面における手描き要素が残されていることになり、上記のデザイン面における「規範」は維持されることになる。一方、K地区ではデザインに宗教的要素は残らないが、植物染料を用いた手描きの要素が継承されることになり、「伝統的」カラムカリの工程面技術の最も重要な規範を継承することになる。すなわち、両地区において「規範」の要素を都合よく抽出し、「伝統性」を解釈したカラムカリ製作が継承されていることになる。

では、このような「伝統的」技術が身についたと判断される基準は何であろうか。本報告において「技術が身体化される」とは、あるレベルまでの技術を習得している状態を指し、そ

のレベルとは、大きく下記の段階に分けられる。

S地区

第一段階：カラムペンを用いて「伝統的」スタイルの人物や神画などを描けるようになる

第二段階：自身の描写の巧拙が分かり、「正しい」形へ修正できる

第三段階：未熟な者の描写を的確に修正し、「正しい」形へ導ける

第四段階：「規範」を逸脱しない範囲で、独自の「創造的」デザインに展開できる

K地区

第一段階：カラムペンを用いて自身のスタイルの人物などを描けるようになる

第二段階：自身の描写の巧拙が分かり、「正しい」形へ修正できる

第三段階：自身の経験等に基づいた、独創的デザインを展開できる

いずれも基本的に重要となるのは模倣経験の反復である。この段階では、考える事や理解する事よりもひたすら手本を真似る経験を積むことが要求される。S地区における訓練の際は、理論に基づく指導があるわけではないが、継続する訓練の中で技術やデザインの意味に関する独自の理解が促されることで、技術が伝達可能となってきた。一方、K地区における訓練（教育）では理論に基づいた指導があり、独創的なデザインも施すことができようになるが、教授者から伝えられる知をさらに伝達してゆく必要がない。S地区のように、単純に言語化されることが難しいが、模倣反復の中で受け取る側に育まれることで「正しさ」への理解に繋がる知を、現時点では「半暗黙知（Implicit knowledge）」としたい。

以上のような両地区における「正しさ」をまとめると、S地区では「伝統的デザイン規範の維持」、K地区では「独創的デザインの展開」と捉えられているといえる。S地区では半暗黙知的技術の伝承によって「伝統的」デザインが、K地区では形式知的技術の伝承によって独創的なデザインが育まれてきた。このような方向性の相違があるため、技術の秀逸/稚拙の判断にも違いが生じている。S地区では鉛筆の様に細く、滲みの無い均一で明解な描線などが「良し」とされ、K地区では滲みの無い描線は評価されるが、多少の歪みは「手描きらしい」と許容され、それ以上にデザインが重視される。

すなわち、S地区では宗教的デザインを「正しい」方向としながら、巧拙は描線や彩色によっている。また、K地区では独創的なデザインの展開を「正しい」方向としながら、素朴な描線や彩色を用いた伝統的な壁掛け布であることを強みとして発信しているのが現在の状況といえる。

（3）身体化された技術とつくり手の認識の関係

ここまで述べてきたように、本報告では、言語化が難しいとされる「伝統的」な過程の中で伝達可能になる技術を「半暗黙知」としてきた。工程面の技術には形式知に近い部分もあるが、それも受け取る側が理解できなければ伝達が困難な暗黙知となる。その伝達を可能にしてきた行為が模倣を基本とした訓練過程の繰り返しである。このような知識は製作者間で共有されてきたと同時に、伝える側と受け取る側の相互関係によって成り立ち、教授者（師）訓練者（弟子）の関係を通して、モノづくりを目的とした訓練の中で伝達が可能となってきた。

技術の身体化の過程において、近代的美術教育を施すK地区では、自身の描きたい表現を追求する「アーティスト」意識が育成されている状況に対し、S地区では、規範を守りながら「伝統的」表現を追求する「アーティスト」意識が育成されてきた。両地区とも、目指す「正しさ」の方向性が、身体化される技術の相違を生み、製作者の内面に生じる意識にも影響を及ぼしてきたといえる。ただし、S地区の製作者たちは、西洋的な言葉の定義をそのまま用いているわけではない。それは、身体化された技術力の差異化、製作者間の差別化など複雑になる人間関

係のなかで、相対的に「自分がどのような製作者か」という内的に形成された自己認識が、恣意的な要素を含んだ「名づけ」に対する違和感や齟齬感を経験することによって、製作者に芽生えた自己表象の典型例と考えられる。そのような製作者としての立ち位置の自覚は、技術を習得し身体化したつくり手たちが、「正しさ」を超えて、次に目指すべき方向性の手がかりにもなり、次段階のモノづくりへと影響してきたと考えられる。

現在、技術レベルや信用が高い工房の実用布生産が急増したことで、あたかも培われてきた知が喪失したかのように見えるが、不可視化が進んだのであって、レベルの高い製作者たちの技術は驚くほど確かである。身体化を経ながら知が伝えられる時、その理解を促す力は大きく、理論的に完成された美術教育の中では生成されない意識が生まれる易くなると考えられる。手描き技術を対象とした師弟関係における「伝統的」技術の習得における身体化は、知の受け手の理解を触発することで、独自の考え方や言葉を編み出した知の伝え手を育み、暗黙知を半暗黙知として伝達可能としてきたのである。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

松村恵里、「良き」女性の観念と生活用品、季刊民族学、査読無し、Vol.166、2018、pp73-82

〔学会発表〕(計2件)

松村恵里、神の物語から「私」の物語へ インド、HIV患者支援施設で製作される模様染色布デザインにみられる試み、日本南アジア学会第30回全国大会、2017

松村恵里、奥能登における『サンノさん』信仰 輪島市西時国地区の事例から、第66回石川県五学会連合研究発表会、2016

〔その他〕

紀要

松村恵里、輪島連携プロジェクト 地域提案型課題への取り組み、金沢大学文化資源学研究、Vol.18、2018、pp3-7、pp49-68 (日英併記)
pp105-109、pp129-149。

小論

松村恵里、インド南東部シュリ・カーラハスティに伝承される手描き染色布-カラムカリの技術とその現状、染織情報 9月号、2016、pp2-3

研究発表

松村恵里、「描く」技術の伝承において捨象されるもの選択されるもの - 南インド産カラムカリの現在、南アジア地域研究国立民族学博物館拠点：MINDAS 「布班」 第2回研究会、2018

講演

松村恵里、知ってるつもりの輪島塗を探ってみる、金沢大学公開セミナー、2018

松村恵里、加賀の友禅を支える青花、草津あおばな会あおばな紙担い手セミナー、2018

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。